

日本科学者会議 福井支部 ニュース

第6号 2001年12月3日発行

- ** 日本科学者会議福井支部
- ** 〒910-8507 福井市文京 3-9-1
- ** 福井大学工学部 小倉久和研究室 気付 Tel 0776-27-8582
- ** ogura@nqueen.fuis.fukui-u.ac.jp
- ** 郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
- ** ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

今号の内容

30周年記念市民講演会・シンポジウムへの参加呼び掛け

30周年記念常任幹事会・幹事会議事録 (抜粋)

支部の声：福井支部結成30年を迎えて (高木秀男)

支部の声：住んでみて感じたアメリカという国 その1-自主・独立心- (永井二郎)

福井支部30周年記念事業を計画しています

1. 30周年記念懇談会 福井支部の30年を語る

日時 2001年12月21日 (金) 18:00~21:00

会場 福井大学 牧島荘 (正門を入れて守衛室脇の通路を北へ、突き当たり)

参加費 3000円 (簡単な食事と飲み物を用意します)

(1) 基調講演：城谷豊氏 (2) 報告：森透氏 (3) 懇談

多数の支部会員の参加を期待します 申し込みは支部事務局まで

2. 市民講演会・シンポジウム (次ページに参加呼び掛け)

21世紀の地域構造と公共交通のありかた

日時 2002年3月16日 (土) 13:30~16:50

会場 福井県国際交流会館 2階会議室

参加費 500円

コーディネータ：桜井康宏氏 (福井大学工学部)

基調講演：川上洋司氏 (福井大学工学部)

シンポジスト報告：川本義海氏 (福井大学工学部)、浅沼美忠氏 (福井県立大学経済学部)

自治体 (交渉中)、市民 (交渉中)

3. 「福井の科学者」30周年記念特集号 (第88号)

30周年記念号特集号へ会員の寄稿を募集します。どのようなことでも結構です。ふるって寄稿下さい。

お願い：2002年度会費未納の会員は至急納入下さい (昨年度約1/2の会員が未納)

過去の会費未納の会員は、分納でも結構ですので、滞納一掃にご協力下さい

い

日本科学者会議福井支部創設30周年記念市民講演会・シンポジウム 21世紀の地域構造と公共交通のありかた

日時 2002年3月16日（土） 13:30～16:50

会場 福井県国際交流会館 2階会議室

参加費 500円

コーディネータ：桜井康宏氏（福井大学工学部）

基調講演：川上洋司氏（福井大学工学部）

シンポジスト：川本義海氏（福井大学工学部）、浅沼美忠氏（福井県立大学経済学部）
自治体（交渉中）、市民（交渉中）

多数の方の参加を！一緒に福井の公共交通と街作りを考えましょう。

支部創設30周年記念市民講演会・シンポジウムの企画について

2001.11.26 支部事務局長 小倉久和

日本科学者会議福井支部は、新しい世紀、21世紀の1年目に支部創設30周年を迎えた。30周年記念事業の一環として、福井の公共交通をテーマとして市民講演会・シンポジウムを開催する。コーディネータの都市計画の専門家の協力により、都市交通の専門家による基調講演、多彩なシンポジスト報告を計画した。

経済の急激な減速は、17年にわたって続いて来た福井空港拡張計画を凍結に導き、金沢以遠の新幹線延長はいよいよ不透明度を増す中で北陸線の高架工事は粛々と進められている。昨冬の56豪雪(1981年)以来という積雪は、暖冬続きで気の緩んでいた福井を直撃、交通を寸断し、麻痺状態に陥し入れた。このような状況のなかで突然起こった京福鉄道の事故とその後続く事態は、福井の公共交通が大きな帰路にさしかかっていることを示している。高等学校に通学する生徒たちは、筆者の娘もそうだが、雪が降る季節になるのを大変心配している。電車に乗る運動、という次元でしか捉えられていない福井の公共交通の体系、交通システムに対する行政の政策は、抜本的に見直しが問われているのではないか。

筆者が福井に赴任するまでいた都市と比べると、福井市内の道路は、比較的広く歩道も整備されている。しかし、健常者の目ではなく、障害者、高齢者の目から見ると、市内の道路には多くの危険が残されている。先日、筆者の老齢の義父が自転車で側道だと思って走っていたところが側溝の蓋の上で、蓋のないところへ突っ込んでしまって十数針縫う怪我で1ヵ月以上の通院を余儀なくされた。公共交通のバリアフリー化が言われ出してからかなりになるが、このような道路や交通機関のバリアフリーはもちろん、利用しやすい公共交通の体系、交通システムの全般的政策の裏付けが必要であろう。

「月間たくさんのふしぎ」（福音館書店）は筆者の「愛読」雑誌の1つだが、2001年9月号のタイトルは「走れ、LRT—路面電車がまちをかえた—」（西森聡 写真・文）である。フランスの地方都市ストラスブールで1989年から始まったLRT（軽量鉄道交通、路面電車）建設を中心とした街作りを紹介している。日本ではほとんど衰退した（させられた）路面電車が、欧米では復活しつつあり、まちづくりの柱になってきているという。LRTによるストラスブールの街作りは12年前からだが、検討はおそらく20年近く前から始まっていたのではないか。二十数年前、筆者は京都の最後の路面電車（市電）が廃止されるのを見た。路面電車が辛うじて健在なのは、広島や高知、岐阜くらいではないか。路面電車が珍しくなって久しい。福井もわずかに残っているだけになった。

先日、福井駅前でトランジットモールの試行がされた。これについて行ったアンケート調査結果が福井新聞で紹介されていたが、力を入れてやった割に評価が相半ばしたことを淡々と報道していた。トランジットモールでどうなるの、という醒めた視点だ。今、大和田地区は一大商業地区になろうとしているが、公共交通の体系と無関係に作られているように見える。ピアからベルへ、そしてコパ

へ。JR福井駅前では200台の地下駐車場の工事が始まった。これらは21世紀の街作りの視点からは古くないか。街作りは、長期的な展望に支えられた、行政の持続的政策、マスコミの熱い取材・報道姿勢、産業・商業界の長期展望、そして市民の粘り強い運動、が原動力であろう。ストラスブールは福井より一回り大きいだけの街である。しかるに、福井ではあいかわらず京福鉄道の路線存続を巡って経費負担の問題だけで議論されているように見える。11月25日の福井新聞には「三国線と勝山線2線の存続で合意、乗る運動の強力な展開を」とあった。街作りの視点が見えない。その視点は公共交通問題に不可欠ではないか。

第2回常任幹事会議事録(抜粋) 2001年10月2日(火) 19:00~20:15

1. 報告 (1) 9/30 支部事務局長全国会議 (2) 9月例会 報告: 加藤武市氏
2. 第31期福井支部の活動について
 - (1) 月例会の計画 10月例会「電子メディア文化独特の人間精神開花のために」 報告: 山岸昭則氏
 - (2) 支部30周年記念行事企画について 1) 30周年記念座談会、2) 市民講演会・シンポ企画について
 - (3) 『福井の科学者』編集方針・発行方針について #86の進捗状況、#87の企画案について
 - (8) 財政 福井大学会員の未納多い。幹事の協力依頼。11月に次期分請求書発行。

第3回幹事会議事録(抜粋) 2001年11月6日(火) 19:00~20:30

1. 報告 (1) 訃報: 10月13日, 支部会員の玉置伸悟先生逝去。 (2) 10月例会 講師: 山岸昭則。
2. 第31期福井支部の活動について
 - (1) 月例会の計画 12月例会 大川洋子(県立大看護福祉学部看護学科、母性看護学)
 - (2) 支部30周年記念行事企画について 1) 30周年記念懇談会、2) 市民講演会・シンポジウム、
 - (3) 『福井の科学者』編集方針・発行方針について 87号企画案 2月に発行を計画
 - (8) 財政 現在預金を含めて残金が少ない。福井の科学者の印刷費、他について、厳しい状況

独り言のコラム 大学における助手のポストの急速な減少を考える

この大学では長年の懸案であった独立専攻設置がやっと認められた。これに伴う教官定員は基本的に学内ポストからの振り替えで、純増はほとんどなかった。助手定員のアップシフト(教授・助教授へのポストの格上げ)があった。数年前の学部改組でも、純増はごく少なく、いくつかの助手ポストを教授・助教授に振り替えた。学内のいくつかの共同センターの専任助教授定員もすべて助手ポストの振り替えであった。さらに、AO入試センター、留学生センター、就職支援センター、教育研究センター、研究基盤センターなど、多数の組織整備が要請されており、またそれに応える必要性もあるから、ますます助手定員振り替えが続きそうだ。しかも、教官定員の削減はこれまでずっと助手定員の削減で対応されたし、助手ポストのない教育学部は、助手ポストをもつ工学部へ助教授ポストを移籍し、定員削減はやはり助手のポストの削減で対応した。

大学としては、助手ポストと教授・助教授ポストを天秤に掛けると、どうしても助手ポストが軽い。これは、文部科学省が新設ポストの純増をほとんど認めず学内ポストの移籍を要求するからであり、また教官定員削減はポストの種類を問わないからで、価値判断として必然的に助手のポストが犠牲になる。今や、この大学の工学部の助手の数は教授の数の約半数である。工学部で新設された学科では教授9に対して助手2というポスト配置である。助手が少ないと困る、という意見がある。しかし、必ず、それでは教授・助教授を減らしてもよいのか、助手と助教授とどっちがいいのか、と言われるし、筆者もそう言わざるを得ないから、表立っては表明しにくい意見である。

大学は教育機関であるが、研究機関でもある。博士課程修了直後の若い人は、多くの場合研究についてはこれからで、自由に研究できる環境があれば、大学院時代の狭い分野からもっと広い可能性を探求できる。また、年齢的に学生と近いから教育効果も大きなものが期待できる。大学を活性化していく原動力になるし、また、その中で彼ら自身も成長することができる。大学は、この様な意味でも教育機関である。学生の教育ばかりではなく、これからの高等教育・研究を担って行くスタッフの養成である。理工系の研究室で研究の最前線を担っているのは博士課程の院生を中心とする学生たちであるが、若い助手はかれらに極めて近いリーダー役を果たし、院生諸氏の当面の目標ともなる。企業から教授・助教授を迎えることが多くなってきたが、それでも大学での若手の養成というのは、個別の大学のみならず高等教育研究機関を活性化する意味で、極めて重要であると思う。そのためにも助手のポストは欠かせないものである。

ところで、助手のポスト減に合せて学審によるポストクが急速に増やされてきた。これは2年とか3年とかの任期付きである。筆者の学生時代にはポストクは国内ではごく少なく、その制度導入が各方面から強く望まれていたものである。しかし、助手のポストを削減してしまったら、数回のポストクを続けてから助教授に応募するしかない。筆

者の院生時代には武者修行と称して、欧米のあちこちをポスドクで渡り歩く猛者が何人もいた。この大学でもそのような経験者が何人も活躍している。しかしそれは多様性の1つであって、大多数の人材がそのような経験をしなければならぬ制度的状況は健全ではないような気がする。むしろ、助手から助教授へ、助教授から教授へ昇任するときには大学や研究所を移る、というのを主流にする方がよいと思う。しかし、日本ではまだまだ教官公募が一般的ではなく、昇任が内部で行われる傾向が強く、欧米の様な環境があるわけではない。大学の活性度がいろいろな指標で測られているが、助手を中心とする若い教官層がどのように活発に活動しているかということは、日本の将来の活性度を測るときに重要な指標となるのではないか。筆者は、助手が教授・助教授に比べて圧倒的に少なくなってしまった現状をいろいろな意味で心配している。

文部科学省は、政府は、大学での人材養成をどう考えているのだろうか。

(2001/11/23 OG)

会員の声

福井支部結成30年を迎えて

高木秀男

今年11月、福井支部は結成30年を迎えた。30年といえば1世代、30年前に生まれたわたしの娘も結婚して一児の母になっている。30年という年月はそれほどの期間である。結成30年を記念して、支部では12月21日に記念懇談会、来年3月16日に市民シンポジウム「21世紀の地域構造と公共交通のありかた」など記念行事を計画しているが、同時にこの機会を利用して会員拡大に取り組むことを決めている。

百人足らずの会員でも30年の歴史ともなると、支部活動の足跡はいろいろな所に残されている。福井支部は原発問題、教育問題、地域開発、自然保護、町づくりなど幅広い問題で公開講演会を開き提言を行ってきた。また、それらの成果を結成5周年のとき『父と子の原発ノート』、10周年のとき『地域を見直す』、15周年のとき『地域を考える』などの単行本として発刊し、支部機関誌『福井の科学者』に発表してきた。『福井の科学者』は現在86号まで発行され、全国各支部の機関誌の中でも第2位の号数を誇っている。これら支部の出版活動については、支部のホームページ (<http://www.jsa.gr.jp/fukui/>) で詳細を見ることができる。

結成20周年のとき、これまでの支部の活動をまとめた『日本科学者会議福井支部20年の歩み』を発刊したが、残念ながら支部活動の原資料の保存は十分ではない。この機会にできるかぎり重要資料を収集し、事務局に保存継承していくようにしたいと考えている。最低限、支部ニュース、総会議案、『福井の科学者』、支部発行の単行本など重要資料は揃えたいと考えているので、会員の皆様の協力をお願いしたい。面白い資料や貴重な資料は、できるだけデジタルカメラに記録しておきたいとも考えている。

友好団体であるゆきのした文化協会は、11月23日、丸岡に「平和文化史料館ゆきのした」を開館させた。ゆきのした文化協会は、基本的にはすべての資料を処分しないで保存するという方針で50年以上活動してきた。そのため他にはない資料が保存されており、この度史料館をつくり公開したものである。福井支部もできれば機会をつかって活動の歴史がわかる資料展などを開催したいし、ホームページでも公開して行きたい。資料の公開は支部の活動を目に見える形にするという意味でも重要であり、若手会員拡大のためにも有効な手段となりうると思う。またこれからの支部活動にとってITの利用が非常に重要になると考えるので、ホームページ充実のために会員の皆様のご協力をお願いすると同時に、新しい活動のアイデアを支部に寄せていただきたい。結成30周年の年を支部の新しい出発の契機にするために。

寄稿 住んでみて感じたアメリカという国 その1—自主・独立心—

永井二郎

昨年10月から今年の8月まで、私はカリフォルニア州のバークレーという所に住む機会がありました。1週間程度の出張旅行では分からなかった「日常のアメリカ」あるいは「普通のアメリカ人」というものに触られたような気がします。そこで、これから何回かにわたって私が強く感じたことをコラムに書いていきたいと思えます。今アメリカについて書くことと言えば、「同時多発テロと炭素菌以外に何があるんだ?!」という雰囲気ですが、あえて第1回目のコラムは、アメリカ人の自主・独立心について書いてみたいと思えます。

近所にPさんという初老の女性が1人で住んでいて、私が一番親しくしてもらった友人かつ恩人です。彼女は大変Independentな人でした。詳しい経歴は知りませんが、現在は時々仕事をしながら何匹かの猫たちと悠悠自適の生活を送っています。決してお金持ちではありません。しかし彼女との話題は、今思い出せる範囲でも、日本の文化の起源・中国の政治体制・地球温暖化とアメリカ政府の対応・商品リサイクルの必要性・大統領選挙の際の共和党批判・カリフォルニア州の電力不足に絡むある種の陰謀説・人間の幸福論・禅宗の思想・現代の若者の政治的無関心・子育て論・日本の小泉首相の将来性・・・という内容でし

た。私の乏しい人生経験から判断するに、このような話題で近所のおばちゃんと話し込むことは日本では決してありません。どうして私が彼女をIndependentだと感じるかというと、彼女はこのような幅広い関心を常に持っており、それを実際に自分の行動に反映させているという点です。自らが情報を選択して知識を得て、自らの判断で物事を処理し、決して精神的に他人（国や州政府、企業、その他）に頼ることがありません。当たり前といえばそれまでですが、私の場合はどうしても気持ちの上で他者を頼っていると言わざるを得ません。「だれかが何かしてくれるだろう。ほっといても何とかなるだろう。」と。この違いは、アメリカと日本の国民性の違いなのか、それとも個人差なのか……。彼女が猫好きで私が犬好きだという点に、個人差がくっきり表れているようにも思えます。

もう1つ別の例です。アメリカの山道を車で走っていて気が付くことは、断崖絶壁に沿った道でもガードレールが無い所が多いことです。「こんな所にガードレールを作るためなんか税金は使わない。危険なことは明白なのだから、各自が責任を持って気をつければ良い事だ。」と言っているように私は感じました。このような各人の自主独立性を前提とするアメリカの政策は、簡潔ドライですっきりしていますが、反面、医療厚生分野を眺めると「お金が無く保険に入れない人（実際たくさんいる）は、病気や大怪我をすることが実質的に死につながる」という悲惨さをも生んでいます。